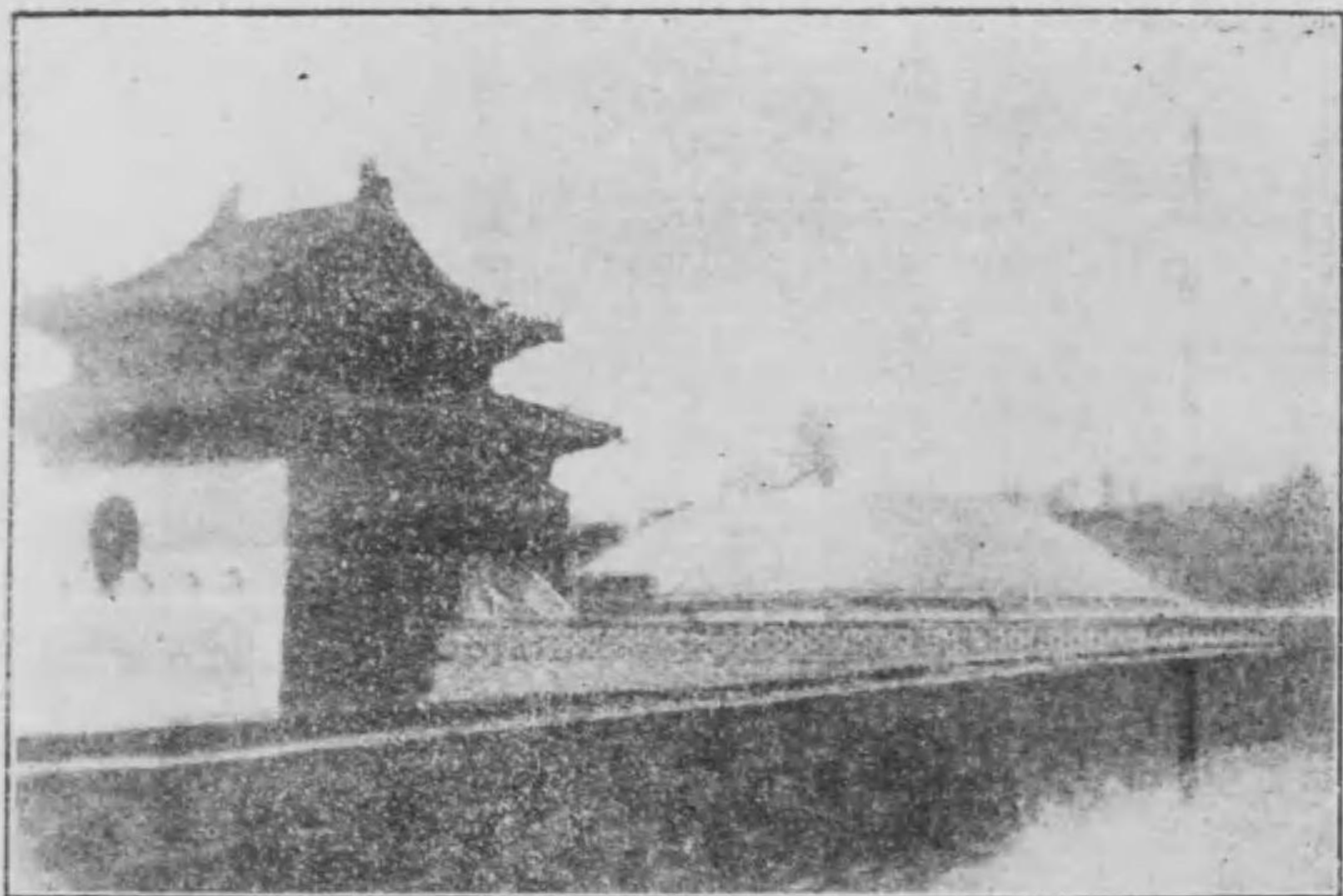


三太郎「物僧騰貴の今日、安い月給で探がすのだから、どうだか知れたものでないよ。」

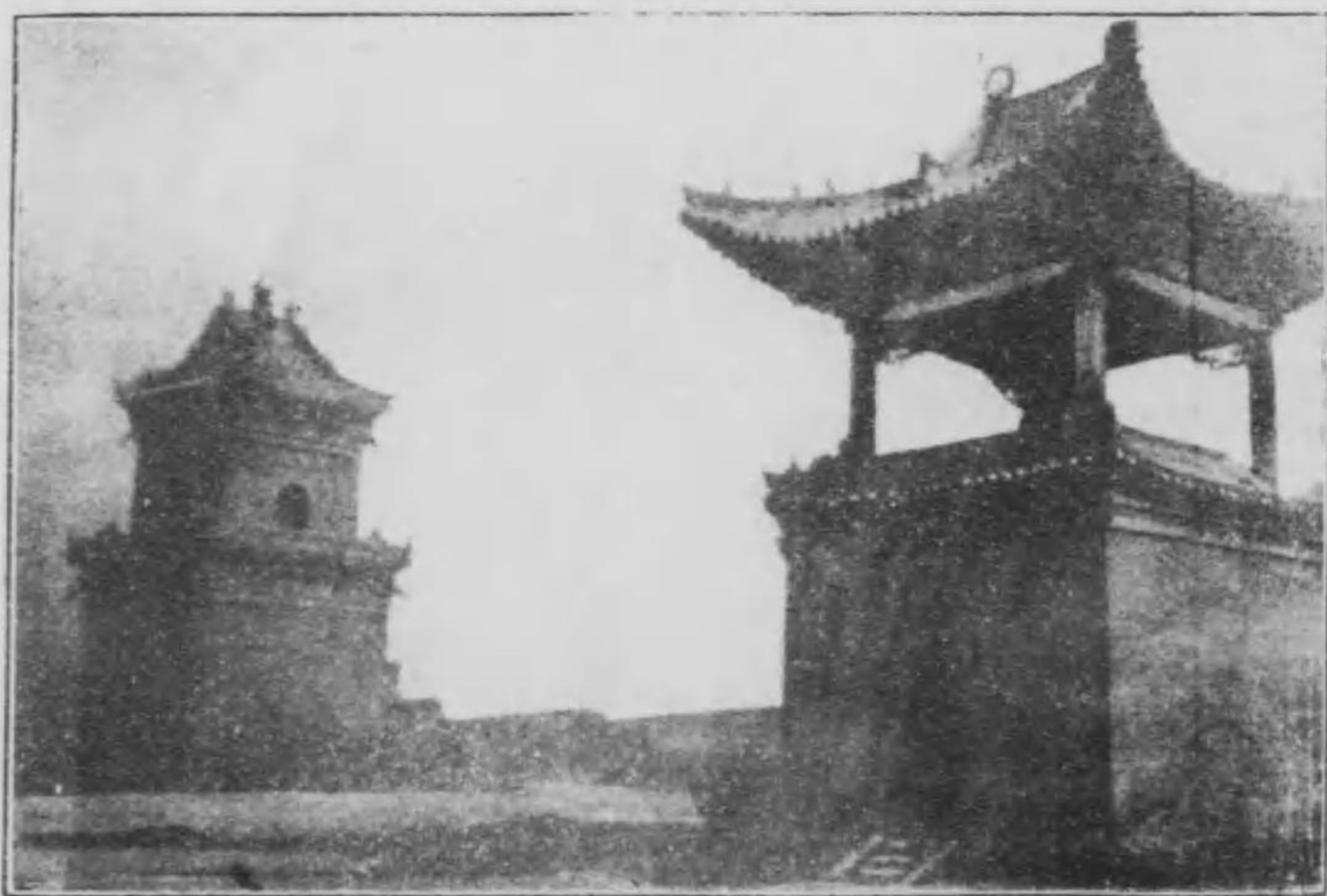
構内には崇政殿、鳳凰樓、清寧宮等あり。碧瓦、金壁、朱欄、光彩陸離として、真に金鑾殿の名に適して居る。奉天城の北方一里餘にして、老松鬱蒼たる所に文皇帝の廟堂、北陸がある。一行の或者は十圓紙幣一枚を呈出して、樓閣上の碧瓦一枚を得んとしたが不成功に終つた。幾年の後には屋根瓦も次第に無くなる事と思ふ。清朝亡んで既に幾年、盛時の驕奢は一時の夢と消えるのは當然である。再び奉天市街に歸り徒歩見物を始めた。城壁外に市場がある。恰も東京の淺草門前と縁日の露店とを合併した様な觀を呈して居る。

四番「あの店に入つて、一つ試食して見ようではない乎。」

五九郎「夫も面白い。やつて見よう。そば屋の様だね。支那そばを喰べて見よう。」  
四番「是は迎も喰べられない、丸て砂齋麥だ。」



(照參頁四一五) 圖五五第 陵北るあに郊近天奉



(照參頁四二五) 圖五五第 庫寶と廟帝關



三太郎「當然です。道路が此通り五六寸も塵芥で埋まり、黄塵濛々たる中で製造するのですから、少し位砂があるのは止むを得ない。」

五九郎「少し位ではないです。逆も喰べられませんか、兎に角取つた丈拂つて今度は城内の立派な店に行つて見ませう。」

四番「茲には、何んでも盗んだ品物が賣りに出て居るので、時々掘出物があるさうです。」

五九「我々の様な外來者が、言葉も知らずに、掘出物を探すなどは無理です。」

三太郎「城内はさすがに大きな店があるね。殊に建物が凡て彫刻物で裝飾して在るのは大した物です。日本なら神社乎佛閣でともなければ、見られない裝飾ですな。」

四番「そこに立派な店があります。色辨酒席とあるから料理屋でせう、這入りませう。」

五九郎「何を注文しよう乎。名前を知らないからこまるね。」



三太郎「料理の献立表を見れば知れるさ。西洋料理ならメニューで定食を注文すれば一番簡単だがね。」

四番「燕菜が八大八小で價洋二十六圓、便飯が六大六小で價洋十二圓とあるが、一食にしては可なり騰いね。」

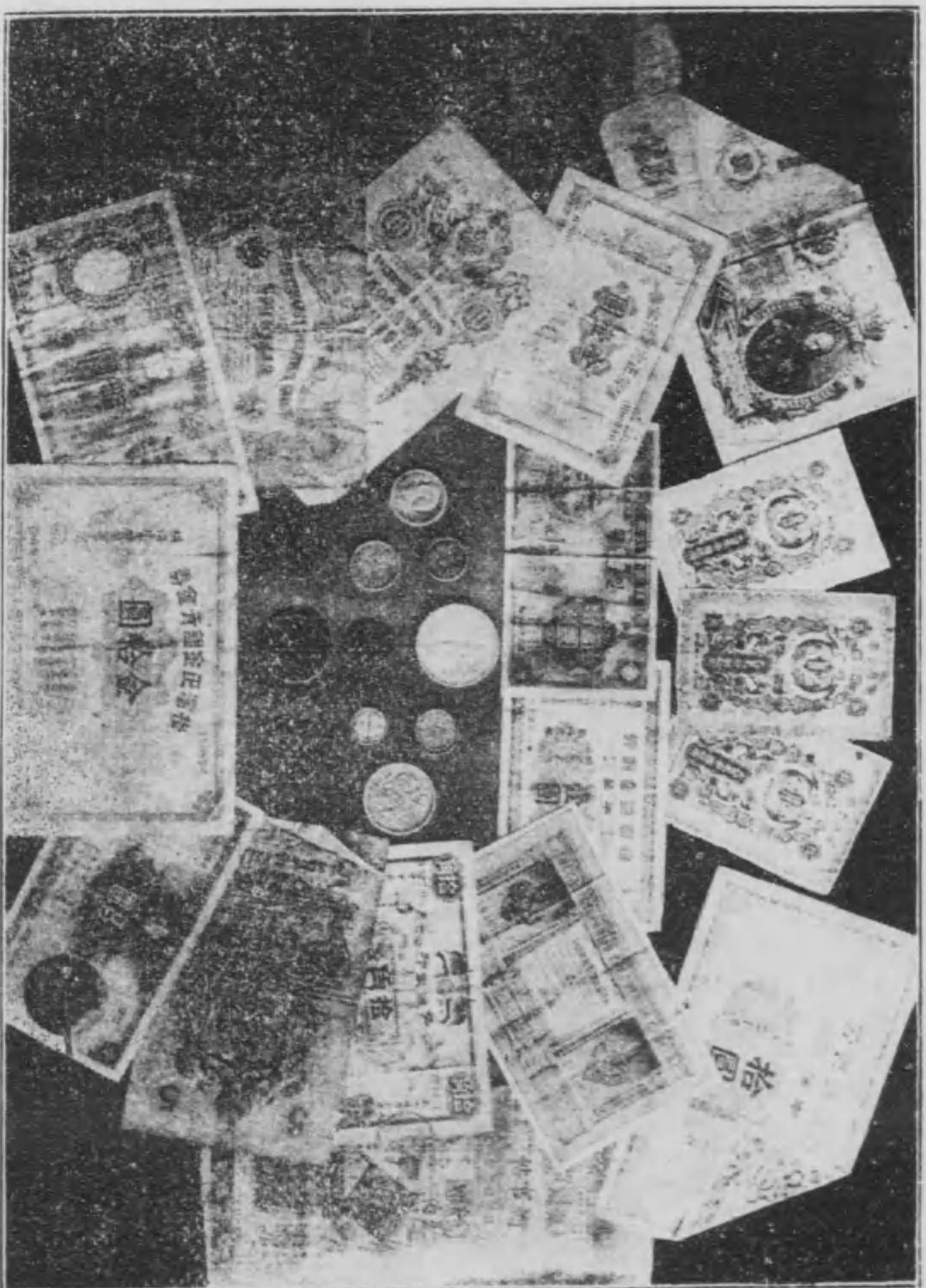
五九郎「支那食は夫を五人でも七人でも、共同して喰べるのだから、頭割にすれば安價ださ。」

三太郎「一品宛取つて見ようでない乎。兎に角先づ紹興酒を注文しよう。毎瓶二角とあるよ。」

四番「金葱鴨と云ふのがあるよ。日本の鴨南蠻の様な物でない乎ね。是を一つ取つて見よう。」

五九郎「此處のうどんなら砂があるまい。鶏絲炒麵を喰べようでない乎。」

四番「大盤六角小盤四角とあるが、どちらにします乎。」



(照參頁七一五) 圖六五第

貨物船と券換定の國三支露日るけ於に場市長



三太郎「毎碗一角と云ふのがあから、日本式に三人別々に三碗注文し玉へ。」

四番「初めて喰べたが案外うまいね。少し脂肪分が多過ぎるけれども。」

五九郎「口磨豆腐と云ふのがあつさりして居るでせう。」

四番「私は兎に角飯を喰はんでは、食事した様な氣がせんから、飯が喰べたいね。」

三太郎「八寶飯と言ふのがあから、夫を取つて見玉へ。」

食事が無事に済んだので、再び市内を巡りあるいた。何と言つて黄塵萬丈の砂煙には閉口せざるを得ない。塵除の眼鏡は絶対に必要である。但し支那人は一向平氣なもので、濁水中の鱒の如く、元氣能く活動して居る。

市内に来て最も眼に着くのは錢莊の多い事である。日本語で言へば、兩換屋であるが、支那では紙幣が一種の商品で賣買せられるのであるから、兩換屋と云ふよりは、金錢賣買所とも云ふのが正當かも知れん。金銀等の硬貨は稀で、千種萬様の紙幣が店頭陳列せられて居る。往來には一丁に一軒位の割合に錢莊の露店があり、



労働者は古紙幣を三十枚も五十枚も手づかみにして、其前に立つて居る。一寸見ると非常に有福の様だが、紙幣の内には古新聞一枚程の価格に過ぎないのもあるので、発行者の勢力消長に従ひ、各種紙幣の価格が毎日變動する事、米や豆の相場よりも更に甚しい。日本内地に於ては到底想像する事も出来ぬ現象である。市の郊外を散歩した際に渴を覺えたから、往來で日本十錢銀貨を出して梨を買つた處が、七個をくれた。然るに、一露人が何所で發行したのか知らんが、兎に角一圓と書いてある紙幣を出して、梨子を買つて居るので、どんなに澤山ある乎と思つて見て居たら驚くなかれ、僅に三個を受取つて去つた。つまり其一圓紙幣は、日本銀貨の四錢餘に相當するに過ぎないのである。獨り紙幣ばかりではない、銀貨までが種類に依て價格に相異なるのであるから、支那の商業は貨幣で賣買すると云ふのは有名無實で、寧ろ物々交換に近いのである。

四番「燕春茶園と言ふ看板が出て居る。茶屋だらう乎。なか／＼大きな建築物だね。」

五九郎「あれには素蘭書館と書いて有るよ。圖書館だらう乎。」

三太郎「圖書館にしては場所が變ですね。本屋の大きいのでありません乎。」

四番「這入つて見たが書物などは一冊もありませんよ。眞中が大廣庭で、周圍に幕が下がつて居ります。なんだか氣味が悪いから、幕の中は見ないで來ました。」

五九郎「茲に大門があります。平康里と書いてある、何の事てせう。」

其内に時計を見ると、奉天出發の時刻に間もないので、見物を切り上げて停車場に赴いた。一行の大部分は既に待合室に集合して居つた。

四番「平康里と云ふのは何の事ですか。」

二十一番「それはビイカンリと讀むので、ビイカンカンをする所さ。」

五九郎「夫て始めて讀めた。どうも變な建物ばかりあると思つて來た。」

二十一番「諸君は書館に行つて來たの乎。」

四番「本屋乎と思つて這入つて見たら、丸て大間違さ。」



十四番「御寺の坊さんが般若湯と言ふ名義で酒を飲むと同じ理由で、書館と言へば孔子様の弟子でも這入り易い譯だね。」

二十一番「書館に通つたと乎、校書を買つて来たなど言へば、勉強家らしく聞えるからね。」

三太郎「支那人も命名がうまいね。大概の事は名前一つで善くも悪くもなるからね。大義名分をかましく云ふ國民は、さすがに違つたものさ。」

豫定の通り乗車して長春に向つた。例の如く夜行列車である。晝間の見物で勞れたので、眠りを欲するけれども、若い將校連は元氣な者で、徹夜横談縦議、氣焔當るべからざる者がある。

十四番「あの宿舎では嘸御迷惑でしたらう。」

三太郎「私等は年中中田舎や山岳を旅行して、まだくひどい宿舎に慣れて居るから一向平氣です。」

四番「あんなに冷淡にするとは豫想しなかつたね。あれに較べると、平壤では非常な優待であつた事が知れる。」

二十一番「地方に依て同じ様には行かんさ。あの隊はまた敗けた乎恥聯隊、そじゃけ勳章呉れん隊と唄はれた程で、仕様のない所だからね。」

二十五番「何を頼んでも返事ばかり立派で、少しもやつてくれないのだから驚くね。」

三太郎「君等は軍人でない乎。戦場に出て野營したよりは増しだと思つて居れば、濟むでせう。」

四番「諸君茲に緊急動議があります。我々が出發以來懲罰委員を設けて、出發の際に忘物をした場合に、之を競賣に附して相當の罰金を徴集して居るのは、決して金を集めるのが目的でなく、旅行團の面目を毀損せぬ様に、各員の注意を促す一つの手段に過ぎないと考へます。従て軍人が劍や軍帽を忘れるのは、無論重罪であるが、團隊の面目をつぶす如き行爲があれば、遺失物以上に懲罰すべき價值があると



認めます。然るに、本旅行隊が、京壇滞在中、一行中の數名が、正装の儘登樓したるのみならず、軍服を着けて行つた爲に、時節柄大に優待されたなどと、自慢し居るのは甚だ怪しからん事と思ひます。朝鮮は御存じの通り、目下暴徒で商店閉鎖の折柄、軍人は特に其行を慎むべきの秋であるに係らず、更に又、時節柄樓主に於ても閉店の相談中で有つたと云ふのに、軍服を以て亂痴氣騒ぎをして來たのは、不都合であるから、調査の上最高の懲罰に處すべきものと思ひます。終り。」

五番「只今委員會を開いた結果を本委員長から御報告致します。調査の結果、四番から申告になりました事實は之を認めます。然るに、軍服は軍人の着物であり、軍人は登樓すべからずと言ふ規定がありません。新兵の際には、隊長引率の下に出掛ける事もあります。而し裸體で行く事は出来ませんから、服を着けて行つたものと認めます。此理由に依り、被告等の行爲は之を無罪とします。終り。」

四番「只今無罪の判決が有りましたが、原告は懲罰委員に對して不信任を申立て、

團長に控訴します。軍服は普通の着物では有りません事は、吾々が軍服を着けて居れば、特殊の待遇を受ける事に依て、明白であります。終り。」

十四番「只今控訴に成りました事件は、之を審査の結果、被告の行爲は不穩當と認めます。但し、一旦無罪の宣告を下したのであるから、懲罰委員の權利を尊重して無罪とし、單に將來を訓誡する事に致します。終り。」

團體旅行は面白い。長い汽車の時間も退屈する事なく、時間が経過する。公主嶺を過ぐる頃は旭日東天に輝き、左右には廣漠たる平野が續き、大陸的の景色を遺憾なく表はして居る。

## 五十 鐘 馮 大臣

長春停車場に降車して見ると、日露支三國の勢力が、恰も固體と液體と氣體とが接觸して居る如く、不安定の状態を以て釣り合つて居る。支那が蓮の葉ならば、露



國は其上に轉々して居る水滴で、日本は眼に見えぬ空氣乎も知れん。蓮の葉と水滴との接觸角の大小は、眼に見えぬ空氣と蓮の葉との間の表面張力に依つて左右せられるのである。米國のそぐ石油が、其効果を及ぼせば、水滴は次第に擴がらぬとも限らぬ。目下在留の日本人は、僅かに四千人だが、之に對して藝妓は百五十人居るとは、當地實業家の自慢話であつた。軍人連は更にシベリヤ方面に前進したが、汽車は大混雑で、到底吾々が其一行に付て行く事は出来ぬ。發車した後を見ると、二千人ほど乗れない乗客が、プラットホームに残されて居る。郊外に至れば關帝廟があり、左右の柱に

生死爲劉宗但識人間無二義

孫曹皆漢賊何曾天下有三分

と大書してあるが、勝てば官軍敗れば是賊とは天下の至言である。

五九郎「向ふに立派な寺院が見える、往つて見よう。」

三太郎「此所には師範學校があるよ。生徒募集の廣告が出て居る。學科の配置は日本其儘だね。」

五九郎「何れ日本のを輸入したのでせう。是は寺院かと思つたら、山門に長春縣郷巡教習所と書いてあるよ。」

三太郎「御寺が巡查の教習所に早變り乎。惜い建築物だがね、日本でも維新の際には丁度こんな事をやつたのだらうな。六十年前の日本の有様は、現今の支那で見る事が出来るから面白い。」

五九郎「正服を着て門外に出て來たのは教習生らしいね。機械體操をやり來たの乎ね。」

三太郎「亂暴だね。巡查教習生が正服のまゝで、教習所の門側にかゝんで、大便をやつて居るよ。」

五九郎「さすがは支那式だね。日本でも維新當時はあんなものだつたか知らん。」



市街を見物したが格別珍しい物は無い。唯歐洲式が遙に勝つて居る事と、露國式馬車が多いのが目に着く丈である。滿洲の停車場は到る處大豆で埋まり、鐵路の沿道は高粱畑際限なく、稀に樹木を見るのみである。公主領では無線電信局、農事試験場などが見るべきもので、緬羊の改良が着々功を奏して居る。

案内者「本試験場の目的は、現在東部内蒙古及南滿洲地方に飼養せる蒙古在來種に、外國種メリノー、シユロツプシアア及びサウスダウンの三種を交配して、是が毛質毛量の改良を計るにあります。在來種は重に食用ですから、毛は殆んど使用に堪へませんが、毛量から言ひますと、在來種とメリノーとの第一回雜種が最も多量で、在來種の二倍に達し、二回雜種になりますと、立派な毛質が得られます。」

五九郎「是がメリノーと言ふのです乎。見た所ではきたない物ですね。」

案内者「毛を分けて中を御覽なさい。此通り中は眞白で、非常に柔かい物が密生して居るでせう。こちらのは蒙古在來種ですが、丸て手ざはりが違ひます。」

五九郎「成る程。是は犬の毛より、少し上等位の程度ですな。」

案内者「肉用としては、サウスダウン蒙古在來第一回雜種が、一番割が良い様です。」

五九郎「喰べてうまいのです乎。」

案内者「喰べてもうまいし、肉量も澤山出來ます。肉の良否は正直に言へば、人々に依て好き嫌ひがある筈ですから、當所では、成るべく多くの人々に試食を願ひまして、良否を決定して居ります。」

五九郎「此邊の氣候はどんなものでせう。滿洲は寒い積りて來たら案外暖かく、雪などは丸て見る事も出來んですね。」

案内者「夫は戰爭に來た軍人が苦しんだ嘶丈をするから滿洲と言へば寒風吹きすさび、忽ち凍傷にでもかゝる様に、内地の人が想像して居るので、決してそんなものはありません。冬は寒いと言つても、降水量が少いから割合に樂で、四月五月となれば急に暖かくなり、七月までは東北地方などより遙に暖かですが、七月になりま



すと雨期に入りますから、八月からは寒くなります。」

茲を去りて四平街に下車し、更に四擲鐵道に依り擲家屯に出て、蒙古の風俗を視察する豫定で有つたが、四擲鐵路の車站は閉鎖せられ居りて要領を得ず、時間の餘裕も少き爲に鐵嶺に向つた。市街の後方に小山あり、俱樂部の設備がある。山腹には鐵嶺縣知事手植松、其他澤山の建札があり、頂上にラマ寺並に塔がある。山麓には例に依て土饅頭が凸起し、附近に小祀が見える。表面には有求必應と大書し、内部には男女の像を畫き、其上に胡大太即、胡太太と竝記してある。聞く所に依れば、胡は狐の意で、動物には狐と書き、神に祀れば胡と書くので、土地を守る神であるとの話であつた。市の入口にもラマ塔があり塔下にある家の門前には

請

在 院 野 蠻 紅 毛 狗  
入 院 知 聲 使 看 守

謹

看

無 音 任 意 遊 賢 探  
大 勢 猖 咬 備 莫 願

告

と書いた札が張つてある。蒙古人は猛狗を飼て置き、案内なしに入れば咬み附かれるから、門外で大きな聲でどなれば、家の者が狗を抑へて呉れると言ふ話を聞いた事があるが、是が即ちそれであるとうなづかれた。支那街の店頭には、大學十章半理財と乎 言不二價、童叟無欺、などの句が見える。兎に角支那は文字の國だけありて、名句が澤山あり、是が各家の柱毎に大書されるので、頗る異様の感が起る。いくら商店でも天錢雨至は何となく貪慾の嫌があるけれども、寺院の門柱に書かれた。禪林有慶自然樂僧舍無塵自在春などは、見ただけでも氣持が良い。

撫順に到り、有名な野天堀や工場を見物し、遼陽に泊し、千山の佳景を遠望し、首山に登り、其他各所の戦跡や礦山を見たが、大同小異て態々書く程の事もない。



只首山の麓で支那人の夫婦が墓参りに来り、墓前に火を燃やし、其側に尻もちをついて、片足を投げ出し、ボートでも漕ぐ様な調子で、上半身を前に屈めたり、後に起したりしながら

アイトウ、アイライ、オー、アイ、オー

と言ふ様な聲を上げて、一時間も泣いて居たのは珍らしく感じた。それから土地に有名な大家族を訪問して見たが、一家四夫婦三十四人居るのには驚いた。

案内者「正面の建物は正房で、右側には東廂房、左側のは西廂房と呼びます。内部は御覽の通り頗る簡單で、入口には竈があり、左右に土間がありて、其兩側の段上が寝臺兼居間と云ふ様なものです。日本の如く広い室は一つもありません。」

五九郎「茲に書いてあるのは何ですか。」

案内者「夫は竈神であります。昔陰子方と云ふ者が至孝至仁にて、黄羊を牲にして竈神を祀つた所が、其後俄に富み、田七百頃を有し、三世の後に娘は皇后となり、



支那人の墓参り。右は老父に掃除をなす、中央の土頭は其墓なり。左は老母に哀號しつゝあること

第五八圖 (五三〇頁参照)



支那人の家及び其家族

第五九圖 (五三一頁参照)



大に繁昌したと云ふ傳説があるので祀つて居るのださうです。」

五九郎「門扉に書いてある武人の像は何ですか。」

案内者「支那の鍾馗様です。唐の玄宗皇帝が病氣になつた時に、絳犢鼻を衣て、右は跳て左に履をはき、腰に筠扇をはさんだ一疋の小鬼が來て、楊貴妃の繡香囊と、帝の玉笛とを盗んで逃げ出した。帝が盜賊何者乎と呼んだら、我は即ち虚耗である。空虚の中を望んで人の物を盗み、人の喜ぶ事を減じて憂を起す者であると答へた。其時破れた帽子を頂き、藍袍を着て角帯をつけた一人の大鬼現はれて、此小鬼を一口に啖つて仕舞ひ、臣は終南山の進士、鍾馗と言ふ者であるが、應舉の試験に落第して残念に思ひ自殺した際に、陛下特に綠袍を與へて葬つて下されたから、其恩に感じて、今陛下に害をする此小鬼を退治したのであると申された、夢を見た事がある。其處で、吳道子と云ふ畫工に、夢に現はれた鍾馗の像を畫かせて、虚耗退散の守護としたのが、鬼を退治する鍾馗と云ふ者の始まりであります。尤も一説には鍾



は菌の名で、其形は終葵と稱する椎に似て居る。神様が椎を取りて鬼を打つの圖を畫いた。其椎に重さを置いて、之を鍾馗と云ふ様に成つたとも言つて居ります。」

五九郎「それでは鍾馗様は菌だと云ふ事になりますね。」

案内者「事實の眞偽は知りませんが、前説は事文類聚と言ふ書に、後説は考工記と云ふ書物に載つて居るのであります。兎に角、鍾馗の圖を門扉にはり、鬼を拂ふ事は玄宗の時代から始まつた乎と思はれます。」

三太郎「私の考では、前説の方が正しい乎と思ひます。但し夫は事實でなく、諷刺的の小説で、玄宗皇帝の玉笛と申すのは、陛下の一物を指し、楊貴妃の繡香囊とは其玉笛を収める袋に相當する者を指す事當然でせう。して見れば、繡香囊に玉笛と云ふのは、楊貴妃と玄宗皇帝との生殖器を指すので、兩人の愛情が餘りに濃厚で有つた結果、勢力衰弱して虚耗になつて仕舞ふ處で、皇帝が先づ病氣にかゝつたので、其虚耗を退治して二人の勢力を回復させた大鬼の鍾馗様は、菌ではなくして朝鮮人參の化物であります。」

案内者「是は始めて伺ひましたが、面白い説で御座いますね。朝鮮人參なら如何なる悪鬼でも之を追拂ひます。」

五九郎「日本に傳つて居る鍾馗様の繪は、支那のとは大層違つて居る様です。」

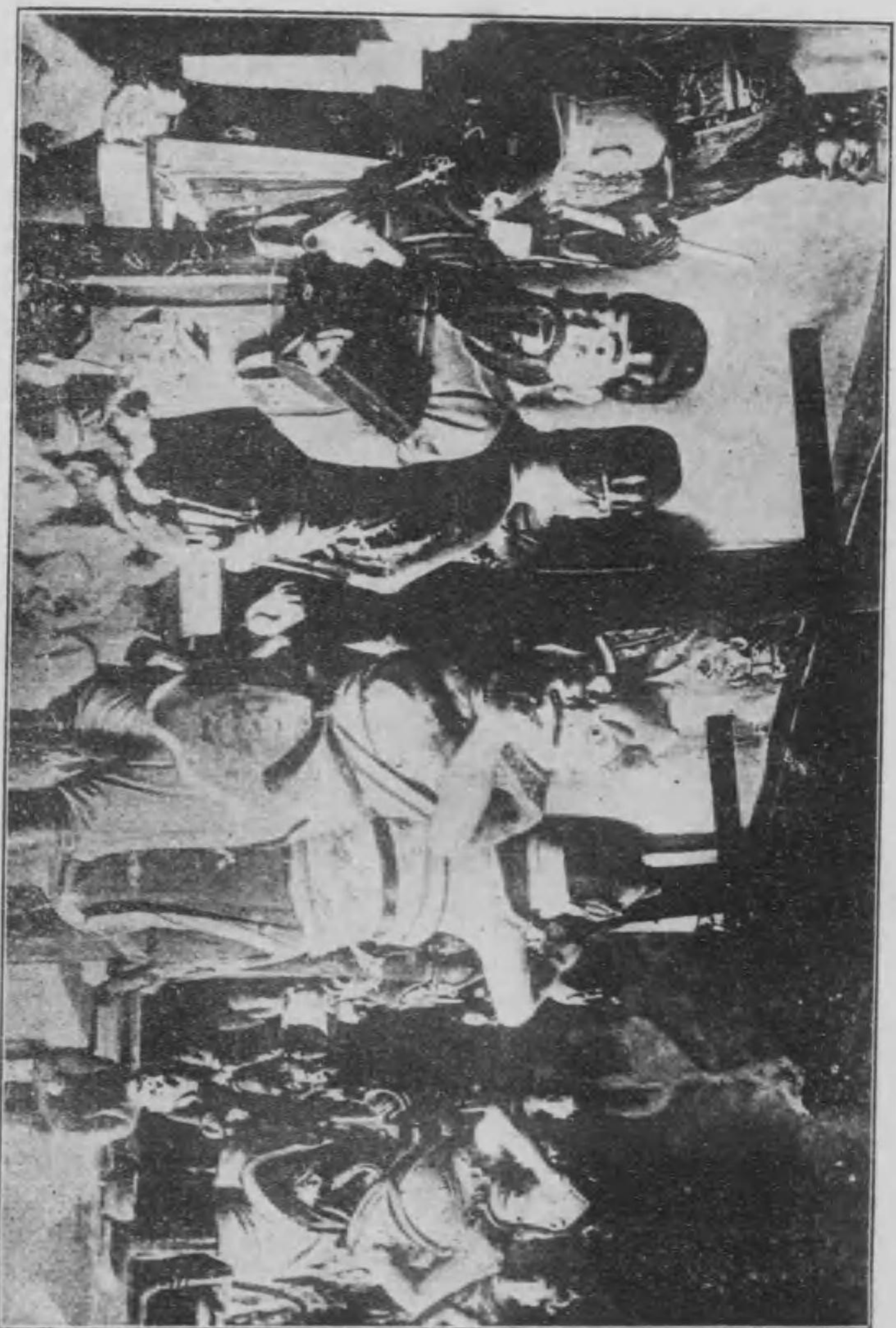
三太郎「あれは元來鍾馗様でなく、日本固有の神様素盞鳴尊であります。日本武尊が東夷征討の際に、賊の爲に野火を放たれ、既に焼打に逢ふ所であつたが、素盞鳴尊が大蛇を退治して得られた神劍を以て、野草を刈り拂へ、之を草薙の劍と稱して尾張の國熱田神社に奉祀したので、尾張地方では、古代から素盞鳴尊が神劍を持ちたる像を家毎に粘つて有つたものです。夫を後世の人が、支那傳來の鍾馗の説と混同して、是を鍾馗様と云ふ様になつたに過ぎません。」

遼陽に公學堂と言ふのがあつた。高等小學校程度であるが、年齢は十三歳乃至二十歳で、内地の中學校に匹敵する。昨年は三歳の子を有せる親が入學したと聞いた。



寄宿舎生百四十名あり。一ヶ月の費用僅に二圓五十錢と言へば、如何に滿洲に於ける支那人の生活が、簡易なる乎を知る事が出来る。日本人を教育する小學校では、隨意科として英語及支那語を課して居る。目下の所では、英語科五十人あるも、支那語科は僅に八人に過ぎません。當地に於ては支那人相手に仕事を成す筈なる故に支那語希望者多數ならんとの豫想に逆比例して居る。英語を學ぶを自慢し、支那語を學ぶを恥とする風があるのは、誠に残念な風潮で、滿洲を見た事も無い人間が、文部省あたりで教育を左右して居るから、こんな結果になるのだ。元來は支那語を正科とする程に必要なものである、と云ふ様な校長の大氣焔を拜聴した。

鞍山製鐵所を見て、湯崗子温泉に浴し、金州城を訪ひ、玉皇廟及び天齋廟を拜して、地獄極樂の模型を見物し、旅順に向つた。旅順驛長は日露戰役當時より遼東の地にありし人にて、沿道の丘陵河海を指摘しつつ、戰況を談られる。精細を極め、我軍苦戰の状態眼前に彷彿たるものがある。二〇三高地に登れば、新舊市街並に東西



〔照參頁四三五〕 圖〇六第



兩港を始めとして、之を守るべき各堡壘は一瞬の裡に現はれ、露軍銃を盡して防ぎ、我軍全滅を期して争奪した理由が、明白に知られる。

案内者「開戦當時には未だ何等の設備なかりしが、五月下旬より工を起し、後には半永久堡壘と化して仕舞ひ、敵は十五糎加農砲二門、小口径砲若干を備へ、八月十九日に始まつた第一回總攻撃には、第一師團は大頂子山及海鼠山東北角の線を占領したるのみにて、本高地には未だ迫まつて居りません。九月十九日は第一師團右翼隊は朝來砲撃の成果により、夕刻より西南嶺頂に向ひ突撃を実施しましたが、近距離に於ける小銃、機關銃火、並に海鼠山赤坂山方面よりする側防火の爲に、失敗に了りました。……十二月五日朝來の砲撃により、突撃の機茲に熟し、午前九時第一突撃隊を前進せしめ、直に西南嶺頂に向ひ、其頂界線を占領しましたが、砲火の集中に倒るゝ者算無きに依り、更に一中隊の増援を以て全部占領し、午後一時左翼部隊を以て東北嶺頂を占領しました。敵は夕刻迄反対側の掩蓋下に隠れて爆薬や石塊



を以て我に抗し、又後方諸砲臺より盛に砲撃を加へ、午後七時四十分約一小隊の敵は、二〇三高地と赤坂山との中間あの邊から逆襲を試みたが、我が軍之を撃退し、此戦に死者將校百〇四名、下士卒二千二百六十一名、負傷者將校百八十四名、下士卒五千二十九名であります。」と二時間餘に亘りて説明があつた。

## 五十一 濃霧

滿鮮地方の見物も無事に終了したので、三太郎と五九郎とは歸國の途に就く事としたが、世界大戦争の影響は、廻り廻つて二人の身の上に非常なる苦痛を與ふる結果を産んだ。大連から門司行きに乗船券の購入を、三日前に旅順行で申込んだが既に遅い、一二等は賣り切れて仕舞つた。仕方がないから、三等を買つた。午前十時解纜の筈であるから、散歩して居ると、八時頃には既に港の方面に乗客が群集して

居る。大急ぎで旅宿に歸れば、自分の居つた室は既に他の客が占領して居る。兎に角其處から荷物を引き出して見送の番頭と共に阜頭に赴いた。乗船せんとして舷門に立番せるボーイに切符を示すと、旅順驛で買つた乗船券は、本社の裏書をもらつて來なければ無効であると拒絶された。

五九郎「馬鹿くしい。無効の切符を賣る會社が不都合でない乎。此切符に色々の注意事項が書いてあるけれども、前以て會社の裏書を受けざれば無効である。と言ふ事が書いてないでない乎。」

ボーイ「兎に角、私の方では、只上からの命令で仕事をして居るのですから、茲てそんな理屈を言はれても、仕方がありません。」

三太郎「兎に角、戻りませう。」

少し戻つて來た所に、船員が一人立つて居る。一本の白筋が袖に巻かれて居るか、軍艦で言へば少尉相當の地位である。彼に裏書の件を談じて見たら、其儘で乗



船差支ないと答へたので早速乗り込んだ。三等客はあちらと言はれて行つて見ると船室は一杯に乗客で埋まつて居る。船首に近い所に空席があるから、兎に角座を占めた。茲に三日間を暮らすの乎と思ふと、地獄に落ちた様な氣がする。夫でも吾々は席があるから結構な方で、中には大荷物の上に腰を掛けて居る支那人もあり、子供を負うて立つて居る婦人もある。

商人「煙草は如何です乎、内地に行けば四五倍高價ですから、御土産に如何です乎。」

五九郎「上陸する際に税金を取られるから、同じ事です。」

商人「大丈夫です。二百本迄は無税です。多少はポケットに入れて置けば知れません。」

五九郎「僕は煙草が嫌ひだから駄目だよ。」

商人「夫では薬は如何です。六神丸は支那の靈薬でありまして、内地に行けば一粒十錢宛ですが、茲では一箱一圓五十錢に致します。」

五九郎「薬乎、夫も嫌ひだが、病氣になれば嫌でも飲まなければならんから、一箱買ひませう。」

既にして解纜の時刻が來り、公海に出た頃に、晝食が供された。一食一菜主義で簡單ではあるが、一二等客の様に態々食堂に集合する必要もなく、給仕が膳部を運んで來て呉れるのであるから、却て結構である。併し室内は日光不十分であるから陰氣で、頭が低い天床に押へられ、不愉快至極である。左隣には關東州の巡査が二人乗つて居る。其話、所に依ると、出帆前日に會社に行つたが、三等切符さへ既に賣切であるとして斷わられた。甲は内地にある親が病氣の急電に接して歸國するのであるから、孝は國家の大本である點から説き立て、兎に角特別を以て切符を賣つて貰つたが、乙は無切符の儘今朝巡査の職務を亂用し、見巡りの風して乗り込み、解纜後に事務室に談判して切符を買つたと言ふ事であつた。正直に切符を買ひながら、門前拂を喰ふ所であつた我々は、成る程競争の世の中は又格別であると感じ



心した。其人も六神丸を持って居るので、價を聞いて見たら、一箱一圓で買ったと言ふので、呆れて仕舞つた。食事が済めば甲板に昇つた。實際の所室内に居るのは何よりも苦しい。折悪しく天候不良で、時々細雨が降りかゝる、甲板上に案山子の如く立つて居るのもつらいが、室内に居るよりはましてある。一人の職人が近寄つて来た。

職人「私は切符無しで乗り込んだのですが、どうしたら良いでせう。」

五九郎「切符を買ふ間が無かつたのです乎。」

職人「賣切れて仕舞つたのです。私今度徴兵適齡で、内地に歸るのですが、此船に乗らないと検査に合はない事になりますので、誤魔化してこつそり乗り込んだのです。罰を喰ひませう乎。」

三太郎「罰を喰ふなんと言ふ事はありません。事務長に面會して事情を話しすれば良いです。但し船の規則として、船内で切符を買へば、船賃が一割程高く取られる

乎も知れません。」

同じく無切符で乗り込む人々にも、色々の種類があり、聞いて見れば何れも相當の理由がある。其内に日は暮れたので、止むを得ず晩食を済まし、苦しい室内に寝轉んだ。左隣の客は一枚の毛布をボーイから借りたが、夫て品切である。何所かに居る三人組の船客に、九枚を貸したと乎云ふ事で、ボーイは小言を喰つた。萬事金の世の中である。早く手をまはして借りて仕舞へば夫て良いので、他の船客が凍死した所て差支は無。客数丈の設備をしたのであるから、會社の責任は盡きて居る。借り遅れた客が間抜けと笑ふより外に仕方は有るまい。夫が即ち現代式である。海は案外に平隠である。満天雲霧に鎖されてこそ居れ、風は少しも無いのであるから、波浪と言ふべきものは起らない。然るに婦人は既に酔うて居る。大部分は船に乗れば酔ふものであるとの理論上から酔つて仕舞つたものらしい。然らずんば室内の空氣が悪い爲である。床板の上に寝轉んで翌朝眼をさますと脊中が痛み出した。牢獄



に入れられた様な感を生じた。甲板に出て見ると相變らず滿天雲に包まれて居る。海水は黄色を帯びて黄海の名に脊かぬ。細雨が降つて、粒は次第に大きくなり、甲板の散歩も不能となつた。こんな不愉快な航海をする位なら、汽車で朝鮮を廻つた方が良かったと後悔した。甲板にテントを張つて呉れても悪くはあるまいと憤慨した。午後一時頃から島嶼が見え初めた。朝鮮の岸に沿うて走りつつあると見える。午後四時突然汽笛が鳴り響いた。多くの乗客が甲板に昇つた。右舷遙かに一汽船が見える。彼汽船からも汽笛が聞えた。相互挨拶でせう、兎に角五里霧中、何處を見ても空々漠々なる公海上で船を見付ければ心持が新になる。其後引き續いて幾回となく汽笛が鳴り響く。

五九郎「何の爲に汽笛を鳴らすのでせう。」

甲「衝突を避ける爲です。こんなに霧が深くては、知らずに接近する恐がありますから。」

進行する事約一時間にして汽笛が止んだと思ふと、突然早鐘が亂打された。船首甲板上で機械を運轉する音が騒がしく聞えて來た。錨を落下するのである。

甲「濃霧の爲に停船するのださうです。」

乙「是て濃霧かね。可なり先まで見えるではありません乎。船長の無能では無い乎。」

船員「船の速度が大きいから、是位の距離が見えても危険です。見えたと思つて船を止めようとしても、惰力で衝突して仕舞ひます。」

五九郎「何時になつたら晴れるでせう。」

船員「三日かゝる乎四日かゝる乎。天候の事ですから請合はれませんです。」

五九郎「心細い事を言ふね。此儘で三日も四日も海中に晒しものにされては、入牢以上の苦痛ですな。」

三太郎「室蘭から青森に渡る汽船でさへ、二三年前以前濃霧の爲め三晝夜ばかり行方不明に成つて仕舞つた事があるから、玄海灘の有名な濃霧に合つて、三日や四日漂



流するのは當然でせう。」

船員「此船には無線電信がありますから、行方不明になる様な事はありません。暴風と違つて、濃霧の停船は安心です。慰勞休暇の積りて、二三日遊んで暮せば良いのですから。」

五九郎「船員は夫で良いかも知れんが、我々は迷惑至極です。夫も一等乎二等乎の様に、相當の設備があるなら未だしもであるが、三等と來ては牢屋同様ですからね。昨夜一晚寝た丈で、脊中が痛むので、今晚はどうしよう乎と心配して居る位です。」

兎に角、夕方になり、加之に濃霧であるから、甲板に居ても仕様が無いので、晩食後はウキスキの勢を借りて寝て仕舞つた。翌朝五時再び甲板に登れば、左舷に島が見える、多分對馬乎と思はれた。七時半には右舷に壹岐が見え、止みかけたる夜來の細雨再び降り來つたから、十時室内に入つた。

船員「外に未だ切符を出さない方がありません乎。」

五九郎「茲にあります。私は未だ出しません。」

船員「是は困りましたね。今迄何回も何回も、五九郎さん居りません乎と呼びましても、返事がありませんから、多分乗客名簿にはあるが、乗り遅れたのかと思つて居りましたよ。」

五九郎「船室は此通り苦しいので、終始甲板に昇つて居たから、知らずに居たのです。」

船員「名簿に有るから何遍も呼んで見たが、返事せぬので消して仕舞ひました。兎に角事務室に來て下さい。」

三太郎「乗船する際には、會社の裏書が無い切符は無効だなんて、乗船を拒絶して置きながら、船客名簿に有つても本人が返事しないから、乗り遅れたと思つたとは前後合はない話ですね。何を云ふ乎事務室に行つて見ませう。」



事務員「人員名簿が既に出来て仕舞つたので、貴方二人の爲に全部書き直す事に成るから困ります。荷物があります乎。」

五九郎「手荷物が一つあります。」

事務員「烟草を持つて居りますと上陸が六ヶしいですよ。」

五九郎「一箱丈は差支ない筈でせう。」

事務員「烟草を持つて居る者は税關に届けるのですが、先刻締め切つて仕舞つたから困ります。」

五九郎「門司に間もなく着きますのです乎。」

事務員「午後二時頃着きますが、前以て届けて無いと、一本でも持つて上陸する事が出来ませんからね。」

五九郎「そんなに面倒なら、烟草などは捨て、仕舞つても良いです。」

事務員「捨てるにも及びませんがね。門司の税關は非常に八釜敷いですから困りま

す。何なら隣席の人の名で上陸しなさいませんか。」

三太郎「偽名するのですか、そんな事は私共には出来ません。門司で上陸を許さないなら、神戸に行けば上陸出来ませう。夫でも上陸を拒絶されたら、一生船中で暮らしても結構です。日本人が日本に上陸出来んと云ふ事もあるまい。」

事務員「神戸なら簡単ですが、貴方は神戸まで行つても差支ないです乎。」

五九郎「私共は別に門司に用事が有るのでは有りませんが、神戸で上陸しても良いです。往きには神戸から乗船したのですが、何にしる船室が不愉快ですから、一時間でも早く上陸したいと考へたのです。」

事務員「瀬戸内海に入れば船も愉快になります。」

五九郎「夫では門司上陸は中止として、神戸まで乗りますから、門司から先は一等にして下さい。何れ客室は幾らも空きませうから。」

要するに門司では上陸が面倒だからと言ふので、我々は神戸迄行く事に決定して



引取つた。約十分程経過すると再び船員が来て、

船員「矢張門司で上陸して下さい。税關の方丈は私の方で何と乎致しますから。」

と言ふ事であつた。此何とか致しますからと言ふ句に氣附かない譯でもないが一體どんな事に成る乎。物は試めしだから其儘にして知らぬふりをして居た。甲板に昇つて見ると相變らず雨が降つて居る。けれども船員が荷揚機の手入をする爲に甲板上にテントを張つたから、散歩には好都合である。中食が過ぎてから左右に島嶼が見える。九州の沿岸に來たのである。天候も次第に晴れ模様に向いた。

## 五十二 包 金

午後三時頃無事上陸して税關の検査を受けた。手荷物を解いて臺上に陳列し、一箱の烟草は特別の検査官に呈出し、姓名や數量を記載した上に捺印を受け、再び荷造りして室外に出てんとする際に、長裾の着流して側に立ち居たる一人が言ひ掛け

た。夫は角袖の税務吏員である。

税務員「貴方はもう検査が済みました乎。」

五九郎「ハイもう済みました。」

税務員「私は税關の者ですが、一寸用事が有るから此方に來て下さい。」

案内に従つて別室に入つた。自分は三月に於ける滿鮮の氣候は非常に寒いものと思ひ、冬の外套を着て居り、腰の邊が非常に膨脹して居るのを見て、不正の密輸入を企てた者と見込を附けたらしい。然らずんば税關の方は何とかすると船員に言はれても、其何と乎する事を特別に依頼せぬ爲に、特別の詮議を受ける事に成つたもの乎とも推察せられる。

税務員「貴方は未だ検査を受けぬ物を澤山持つて居る筈です。さあ全部出しなさい。」

五九郎「はあ。有ります。是です乎。」

税務員「夫は何んです。色々な物が有るでは有りません乎。」



五九郎「是は磁石です。夫からは時計です。」

税務員「時計を二つも三つも持つて居るのは怪しからん。」

五九郎「夫は時計ではありません。一つは氣壓計で、一つは金貨入です。そんな物まで検査を受ける必要は無いでせう。」

税務員「身體に着いて居る物も、全部検査場に呈出するのが規則です。」

五九郎「規則と云ふものは面白いものですね。此處の税關を通つた人間は、私の見て居る間丈でも何十人有る乎知れんが、時計や財布を検査場に出した人は一人も見當らないが、兎に角、見込まれたら仕方が無いなら有り丈出ませう。」

税務員「未だ有りませう。外套を脱ぎなさい。ポケットに有るのは何です。」

五九郎「是です乎。是は財布です。是には紙幣があります。是は鼻紙で、是はハンカチーフです。」

三太郎「丸て天一の奇術を見る様だね。色々の物を出す處を見ると。」

税務員「腰に下げて居る革の入物は何です。」

五九郎「是です乎。是には銀貨が這入つて居ります。」

税務員「まだ有りませう。残らず出しなさい。」

三太郎「君出して仕舞ひなさい。高價の物が、まだ口の中にあるでせう。」

税務員「口の中に隠して置くなどは、不都合千萬でないか。さあ出しなせう。」

五九郎「口の中にある物です乎。夫は高價な物には違ひないが、税關の検査を受くべき性質のものでは有りますまい。」

税務員「何品でも、所持の物は検査の際に呈出するのが規則です。」

五九郎「左様ですか。是ですよ金の入齒ですがね。」

税務員「まだ外の物がありませう。そんなものでなく、帯の下の方が膨れて居るが、夫は何です。」

五九郎「其處には金があります。」



税務員「残らず出しなれよ。」

五九郎「自分の身體に着いて居る物まで、出さんでも良いては有りません乎。」

税務員「今も云うた通り、身體に附けてある物でも、全部出すのが規則です。」

三太郎「遠慮せずに出し玉へ。徴兵検査の折には矢張り出して検査を受けたのでせうから、此處で出して見せても良いては無い乎。」

五九郎「出して見せなくとも、男子たる者が腰の下に金をぶらさげて居る位の事は知れた事てせう。少しは大きい小さいの別は有つた所で、税金を掛ける目的物にはなりませんよ。」

税務員「一體支那で何をして居る者てす乎。」

五九郎「支那に居る者では有りません。出張を仰せ付つて視察に行つて來たのです。」

税務員「出張をしたと申すと、軍人で御座います乎。飛んだ御迷惑を掛けまして、どうぞ悪からず。」

五九郎「私は軍人では有りませんが、あなたは夫が職業なんですから遠慮は御無用です。」

泰山鳴動して鼠一匹の獲物も無く、折角の検査は龍頭蛇尾に終りを告げて仕舞つた。停車場に向ひ午後五時三十分門司發車で、大分方面行きの下りに乗り込んだ。」

三太郎「收税吏ミツギトリの天國に行くは、駱駝の針の孔に入るよりも難しと聖書にあるが實際ですな。」

五九郎「いくら何でも、金を出して見せないには、驚いたね。」

三太郎「前以て金を出して見れば、良いのでしたらう。」

五九郎「船の中で、税關の方は何と乎して上げますからと言はれた際に、金を出せば、あんな事が無くて済むのであつたかも知れません。」

三太郎「あんな事は二度と實驗する事の出来ない貴重な經驗です。いくら金銭を出しても、あゝ言ふ事を實際にやつて見る事は出来ませんからね。」



不意に喧嘩聲が聞えたので、窓を見ると、建札に次は曾根と書いて有るのが眼に着いた丈であつた。一名の労働者が乗車せんとした際に、先に乗つて居た一人の洋服が、此室は二等室ですと注意を與へたらしい。所が其労働者は近頃の大景氣で、懐が暖かいと見えて、青切符を持つて居たので有つたからたまらない。

労働者「何をぬかすんだ、手前方の様な洋服細民とは違ふぞ。切符に赤や青の區別が有る位の事を知らんて、汽車に乗れるかい。間拔め、今度ばかりでは無い、始終汽車で上り下りをする御兄さんだぞ、能く此顔を拜んで覺えて置け。石炭屋が國會議員に成り、豆腐屋が大臣に成れる大正の今日だぞ。労働者が二等車に乗れんと云ふ規則が法律の第何條に有る乎。何も二等車が手前の様な洋服細民を乗せる爲に出來たものでは有るまい……。」

散々悪口を言ひながら、扉を開けて室内に入つて來た。御兄さんを見ると、年の頃は三十四五歳乎四十前後、赤銅色に焼けた労働者で、右手には直徑一寸内外、長

さ一尺程の木柄を附けた半圓形の鐵製の鉤を持つて居る。多分停車場乎、船着場の荷揚人足らしく推察せられた。幼い時から重い荷物を肩に載せられたため、身長は五尺未滿の小男であるが、肩幅は割合に廣く、頑健なる體格を具へて居る。素肌に仕事着を一着に及んだ丈で、裾は僅に膝に達して居るに過ぎん。室内に入るや、兩手で仕事着の前を左右に開いた。サルマタではなく、六尺禪を締めて居る。白木綿の新しいのでしつかり包んてはあるが、兩側から、刻み昆布の様に粗いのと共に半金のはみだして居る。室内の先客に敬意を表する積りである乎、腰を左右に廻し、御神體を一同に拜觀さしてから、室の中央に座を占めて居つた二婦人に向つて眞直に進んで行き、其間に割り込んだ。兩婦人は黙して左右に席を開き、同乗者は笑ふに笑はれず、怒るに怒られず、目と目で話をして居るが、労働者は相變らず兩手で前を開きながら、盛んに氣焰を擧げて居たが、二つ目の停車場で下車した。

五九郎「北九州には面白い習慣があるね。人の前に出る時には包金を出すのが禮と



見える。税關で私に金を出しなさいと言つたのが、本當に出させる積りであつたのか知らん。」

三太郎「あれは此地方一般の習慣と言ふ譯では有るまい。御兄さん少し酔つて居つた様だから、氣焰を擧げたのでせう。」

五九郎「いや、さうとも限りません。北九州では、凡て金が物を云ふのであるから、初て貴人の前に出てたり、何か頼んだりする際には、包金をせないと駄目だと言ふ癖を郷里の友人から聞いて來たが、今の労働者は、やはり其包金を我々に見せたのでせう。婦人に對しては殊更に丁寧に見せて居つたてはありませんか。」

三太郎「さう言へばさうかも知れんね。大概包金を受取るのは、婦人の手を経て居る様だから、將を射んと欲すれば先づ其馬を射よと言ふ論法で、主人と談判する前に先達て婦人に包金を見せて置くのが、成功の祕傳だと言ふから。」

五九郎「今の労働者の口眞似ては無いが、金さへ出せば二等車にても一等車にても



和氣公の碑 (第五五七頁参照) 第一六圖 和氣公の碑



乗れるし、議員にても大臣にてもなれる大正の聖代であるから、議院や内閣でも、今の様な餘興が時々出て面白いでせうね。」

隣席之子供「USAと書いて有るのは何んと讀むのでせう。」

三太郎「USAなら北米合衆國の事です。ユナイテッド、ステイト、オブ、アメリカの略字です。」

子供「此所は亞米利加です乎。」

氣が附いて見ると、汽車は既に宇佐に停車して居る。大急ぎで下車した。今迄の旅行で身體は全くの穢磨けがれまろとなり。おまけにこんな記行文さへ書いた。思へば實に筆の穢である。今夜は宇佐八幡に一泊し、和氣公の遺跡を尋ね、元の清磨に變らずばなるまい。

事實は信仰の基礎であるが、觀察の錯誤は迷信を生む事に成る。事實の真相は科學的研究に依てのみ闡明せられ、科學は物理學に究竟する。信仰物理學の説く所は



天真にして迷悟に屬せず、形式に流れず、舊慣に捕はれず、學ぶ者をして釋然解脫する事を得しめる。冀ふ所は、此功德を以て普く一切に及ぼして、曠劫の迷信を消滅せしめ、我等と衆生と共に眞理に達するを得ん事である。又願くは讀者が我を擁護して、晝夜恒常に此主義を世界に擴めん事に力を盡されん事を祈る次第である。

信仰 佛利 二人行脚 終



川山珠

大正八年十一月一日印刷  
大正八年十一月五日發行

(信仰佛利二人行脚奥付)

【定價金參圓】

著者	日下部四郎太
發行者	東京市本郷區駒込坂下町四十八番地 野間清治
印刷者	東京市神田區中猿樂町十七番地 青柳誠造
印刷所	東京市神田區中猿樂町十七番地 中外印刷工業株式會社



發行所

東京市本郷區駒込坂下町四十八番地

大日本雄辯會

電話小石川二五・三六・三二七  
振替口座東京三九三〇



第七 通俗 教育道話

安藝愛山先生著  
■四六判裝幀極華麗  
■定價六拾錢郵稅六錢  
色々珍らしい話、面白く書いたもの、読み出し可笑的くつて、  
訓を極く易しく面白く書いたもの、読み出し可笑的くつて、  
止められぬ。そして爲になる教訓と戒告とに充ちた書である。一  
般家庭は勿論、學校のお祈りの種、課外修身書、講演の資料として  
亦絶好の書、出版勿々重版亦重版熱狂的大歓迎を受けてゐる。

女が生活するには

中村孤月先生著  
■四六判裝幀極華麗  
■定價金壹圓郵稅六錢

内容  
▼女の地位と其働き方  
▼女の働きとその収入  
▼短時間を利用する結果  
▼女の仕事のいろいろ  
▼婦人の覺醒について  
▼その他數十項

婦人達に深い同情と理解がある。新著者が最も行届いた調査の上  
に成つた書也。

平井晩村先生著

花の涙

■四六判裝幀極華麗  
■定價金壹圓郵稅六錢

一代の文豪平井晩村先生が病苦をかかして執筆せられたる最後の絶作にして、再び起つ能はざるを知るや特に此の書の出版を本社に託されたり。従つて全篇總て血と涙とに彩られ先生の精根は悉く此の一書に盡されたり、乞ふ、先生の生前を偲ぶよすがとして、此一書を座右に備へ永く記念せられんことを。

騎士物語

矢口達先生著  
■四六判裝幀極華麗  
■定價金壹圓七拾錢郵稅八錢

著者は早稻田大學講師、其文名は一世に高い、本書は有名なる傳説物語を英國のアーサー王の王妃の騎士であつたランロットの一生を書いたもの、波瀾疊々たる架空的記録である。或は美しい愛情に涙を絞り、或は手に汗するやうな眞剣な試合あり、或は恐ろしい冒険あり、何人にも興趣あり、切に家庭の書架に此一巻を奨む。



■ 著名大の二の有曾未 ■

支那文學 概論 講話

鹽谷温先生著  
菊判總クローヌ  
定價參圓稅拾八錢

本書は東京帝國大學に開かれた夏期公開講演のものを更に修正増補したもの、著者は支那文學方面の權威、上卷は音韻詩賦文章填詞の全般に涉り、下卷は、等しく出版界に渴望されてゐた支那の戯曲小説(西遊記、三國誌、水滸傳等)を詳述し且つ論評絶妙也。

著者は現代一流の文章家也。本書は此の著者が一兵卒として出征し、血河屍山の中より見た實戰の有様のみならず、戰爭より受けつた兵卒としての内面生活を遺憾なく描出したるもの、杜翁の「戰爭と平和」に比敵すべきか、凄慘、悲壯、深刻を極めてゐる。

屍の中より

大倉桃郎先生著  
定價壹圓六拾錢  
郵稅八錢

講談社發行の二大雜誌

講談俱樂部

月刊雜誌

定價五拾錢

(郵稅貳錢)

新講談、落語、歴史小説、新小説、脚本、浪花節、活動寫眞、演藝記事、浮世話等何れも一粒選りのものばかり！  
眞、演藝記事の特別大懸賞あり、驚く勿れ賞金毎月壹千餘圓！  
毎號十數種の特別大懸賞あり、特別號を六回に増加し、我國讀者の要求より年四回なりし特別號を六回に増加し、我國講談落語雜誌界の本家本元として雜誌界未曾有の大盛況！

面白俱樂部

月刊雜誌

定價四拾錢

(郵稅貳錢)

新小説、歴史小説、新講談、落語、史傳、逸話、家政、料理、衛生、園藝、學生欄、少年少女欄、演藝、漫畫等總て萬人向きの面白くて爲になるものばかり、雜誌界の明星！  
毎號特別大懸賞あり、口繪寫眞版美しく、且つ近時紙數大、娛樂雜誌として空前の大好評！

東京本郷 四坂下 八 講談社發行 振替 東京 六六二 九



フ-3391  
一 年  
元

大正のイソツブである  
鳩翁道話

小林英一著 農村道話集

定價壹圓拾錢 稅六錢

安山著 家庭百話

定價六拾錢 稅四錢

蛭子著 おけらの半生

定價壹圓貳拾錢 稅貳錢

安山著 常識訓話

定價五拾錢 稅六錢

卓上演説 (一名五分)

定價八拾錢 稅六錢

安藝山先生六大名著

通俗教育道話

定價四拾錢 稅四錢

通俗教育道話

定價四拾錢 稅四錢

通俗教育道話

定價四拾五錢 稅四錢

通俗教育道話

定價四拾錢 稅四錢

通俗教育道話

定價四拾五錢 稅四錢

通俗教育道話

定價四拾五錢 稅四錢

各卷、笑ひながら修養の出る  
全く新時代の生んだ新修養書!!

大日本雄辯會發行圖書



~~384~~ 049  
~~136~~ K082



終